夢童（ゆめわらし）

菅波　茂

99.7.22

# ネジール君の来日

今年7月7日、七夕の日。ネジール君(3)がユーゴスラビア・コソボ自治州から両親と一緒に日本に来た。目の悪性しゅようである網膜芽細胞しゅを、金沢大医学部付属病院で精密検査し、治療するためである。悪性しゅようのため転移があれば完治は難しい。それでも両親は多くの日本の人の善意に感謝している。

ネジール君の病気は今年1月に判明。3月にユーゴの首都ベオグラード市の病院で、右目の摘出手術を実施。しかし、転移を予防する継続治療は北大西洋条約機構（NATO）軍の空爆により中断していた。ユーゴでは、網膜芽細胞しゅが年間約300例あり、そのうち60人（20%）の患者がコソボで発生している。

AMDAは4月4日から、コソボ難民支援活動のためアルバニアで活動している。NATO軍による空爆終了後の6月18日から、コソボの第2の都市であるプレズリンで活動を始めた。派遣された上田明彦医師（小児科）が診察した患者の中に、ネジール君がいた。急を要する網膜芽細胞しゅのため、上田医師は現地やヨーロッパで治療を受けられないかと、国連機関や欧米のNGOに当たった。

引き受け先はなかったが、放り出すわけにもいかない。捨てる神あれば拾う神あり。コソボ難民支援活動でお世話になっている日本アルバニア協会が、金沢大医学部付属病院の協力を取り付けてくれた。ここから流れは加速した。日本大使館が特別に短期滞在ビザを発行、全日空によるウィーンから金沢までの座席提供。日本アルバニア協会の人々の善意が一気に集積した。そしてネジール君が日本に来た。

AMDAはコソボ長期支援体制の確立のため、アルバニア支部とコソボ支部の発足を進めている。同時に空爆被災民であるセルビア人救援のため、ボスニア・ヘルツェゴビナ共和国にあるセルビア人共和国のAMDA支部から、医師が調査のためベオグラード入りした。「必要とされればどこへでも行く」というAMDA精神は多くの善意の人たちのネットワークによって現実化されていくことに改めて感謝したい。

（アジア医師連絡協議会代表・題字は筆者）